

# 岡倉天心 『茶の本』について

服 部 通 子

## I. はじめに

茶道に興味を持って書物を探してみると、さまざまなアプローチで茶道を扱っていることには驚くばかりである。伝統文化としての解説書、茶の作法・点前の教授書、茶道具・茶室の写真集、茶の宗匠の伝記、キリスト教など宗教との関連を論じたもの、現代の社会の中でのヒーリング効果を論じたもの、女性の社会的地位と関連して論じたもの等々。

同じ書棚に並んではいるが、『茶の本』Okakura-Kakuzo: *The Book of Tea* (1906)<sup>①</sup>は、茶道を主題として展開された日本文化論として、以下の特色を兼ね備えた唯一の書物であろう。第一に、西洋文化に対して、茶道に代表される日本文化の理解を促す目的が明確であったこと。第二に、英文に著され文学作品としての鑑賞に堪えること。第三に、1922年の日本語抄訳に先立ちドイツ語、スウェーデン語の翻訳が出版され、現在もフランス語、スペイン語、イタリア語、エスペラント語など十ヶ国語以上の翻訳が出版されていることの三点である。

著者の岡倉天心(1862・文久2年-1913・大正2年)は、東大在学中から、東京帝国大学教授として来日したアーネスト・F・フェノロサ Ernest F. Fenollosa (1853-1908)の通訳として、美術品の収集を手伝い、法隆寺夢殿の救世観音像を世に開扉するときに立ち会ったことで知られる美術評論家である。東京美術学校の校長を務め、日本美術院を設立、亡くなる直前には古社寺保存法の成立に貢献し、法隆寺壁画を死守した日本美術界にとってはかけがえのない足跡を残した天才であった。生前出版された『東洋の理想』*The Ideals of the East* (1903)、『日本の覚醒』*The Awakening of Japan* (1904)、『茶の本』*The Book of Tea*

(1906)の著書を通して、また、亡くなるまでの5年間は、ボストン美術館の博物館員として、東洋・日本文化の紹介者の役割を果たした。

このような活躍をした天心の勉強振りと教養は、6歳年下の弟岡倉由三郎の「次兄天心をめぐる」<sup>(2)</sup>に詳しい。天心は、横浜で福井藩から命を受けて主に生糸を扱う貿易商であった岡倉勘右衛門の次男として生れ、耳から自然に英語を身につける環境に育ったという。7歳の頃からジェームズ・バラ James Ballagh の私塾で英語を学び始め、母の死によって9歳で横浜中山の長延寺に預けられ、住職玄導和尚から漢学を学び、長ずるにしたがって、漢詩、南画、琴もそれぞれ師について学んだという。また、23歳でフェノロサ、ビゲローとともに園城寺法明院の阿闍梨桜井敬徳から菩薩十全戒牒を授けられ、仏子覚三となる。文部省の美術取調べ係としての欧米視察や中国出張で、それぞれの土地と人々にふれ、インド旅行で後にアジアで初めてノーベル文学賞を受けたラビンドラナート・タゴール Rabindranath Tagore (1861-1941) と親交を結んだことなどの体験が、彼の業績に生きている。

『茶の本』の中で天心は、日本人は日清日露戦争に勝利したが、好戦的国民ではなく、花や茶を愛する優雅でかつ気迫に満ちた精神生活をおくっている国民であることを知らせようとしている。茶道という文化があることを、また、西洋も東洋に学ぶものがあることを、喩えと押韻、リズムに満ちた華麗な英文で伝えている。本稿は、天心の描き出す「茶道」を分析し、その中に暗示される人生観を論じることを目的とする。

## II. 『茶の本』執筆の目的と背景

執筆当時、天心はボストン美術館の中国・日本美術部顧問であった。収蔵されている日本美術品の整理、目録作成にあたりながら、講演活動、論文執筆を行っていた。美術館の理事夫人たちに美術品収蔵用の入れ物を作らせる会をもち、茶をふるまいながら講演をすることもあったという。ボストンでの庇護者であったイザベラ・スチュアート・ガードナー Isabella Stewart Gardner 夫人 (1840-1924) 宛の、展覧会初日に

茶を立ててくれるよう依頼する手紙、茶道具一式の送り状<sup>(3)</sup>が残されており、また、天心のボストン時代愛用の茶籠一式（茨城大学五浦美術文化研究所所蔵）も残されている。当時、天心の開いた茶会で、茶の湯を体験したことのある人たちがボストン上流階級の中にいたのである。この本の原稿は、そのような折に夫人たちの前で一章ごとに読み上げられたという話も伝わっている。タトル Tuttle 社版『茶の本』の序文で、エリス・グリーリ Elis Grilli はいう。

この本は少数のエリートに向けて書かれたのです。東洋と西洋とを分け隔てている精神的誤解に対して、彼が抗議するときと同調してくれることを期待して。そのほかの人々には、自分の主題が「コップの中の嵐」のようなものと受け取られるのではないかと著者は思っていたそうです。ところが、東洋の思想を理解する鍵を見出せると好評でした。岡倉の洞察力と思いやり、興味をそそる叙情的な文体で、岡倉が予想した以上に多数の読者を獲得したのです<sup>(4)</sup>。

『茶の本』の完全な翻訳が、岡倉由三郎の弟子、村岡博訳で岩波文庫から出版されたのが1929年である。その「はしがき」<sup>(5)</sup>に由三郎は、「茶の会に関する種々の閑談やら感想やらを媒介として人道を語り老荘と禪那とを説き、ひいては芸術の鑑賞にも及んだもので、バターの国土の民をして、紅茶の煙のかなたに風炉釜の煮えの別天地のあることを、一通り合点行かせる書物としては、おそらくこれを極致とすべきかと、あえて自分は考える」と書いている。

2005年9月、ボストン美術館を訪れ、ポーツマス条約締結100年を記念した特別展示「記録された戦争——歴史と画像に残る日露戦争——」を見る機会があった。新聞記事、カリカチュア、版画、写真などに現れる日本の姿は、戦勝に酔い、世界の中で翻弄される日本であった。その最中に暮らした天心としては、日本人の別の側面、深みある精

神生活を伝えたいと願うのは当然という思いを抱いた。

以上のことから、天心の執筆意図は、西洋文化に対して日本の精神文化理解を促すことであったことが明確であると思われる。

### Ⅲ．『茶の本』の概要

『茶の本』は、全7章で構成されている。各章の内容をそれぞれ一言で表すと、1)「茶道」の意味、2) 歴史、3) 道教と禅・思想的背景、4) 茶室・茶をたてる環境、5) 芸術鑑賞から見た茶道、6) 茶人の花の扱い、7) 茶人の生き方/死に方という流れになる。

全体の構成は、日本人の精神文化紹介という目的にかなうよう三段構えになっていることが分かる。まず、第一章で読者の興味をひきつけるため、紅茶の国イギリスやボストン茶会事件の例に触れながら、諸外国とは異なり、日本には茶を喫することが審美的宗教にまで高められた「茶道」という、西洋が見習うことのできる文化があることを示す。次の第二、三章は、実践を重んじる茶道には長い歴史と思想的裏づけがあることを述べ、論理的に、見習う意味があると納得させるかのようである。第四章以降は、茶道を実践する際の茶室や道具に暗示される哲学、客との交流における心構えなどの、「茶道」における全般的な知識を、茶室の外から内へと視線を移しながら概説していく。読者は、詩的表現で語られる茶花や茶人の生き方を通して、日常生活の中に生きている「茶道」と出会うことになる。以下各章の要約をしながら、天心のいう「茶道」に考察を加えてみたいと思う。

### Ⅳ．第一章 人間性の茶碗 The Cup of Humanity

#### －東西の出会いの場－

『茶の本』であるからには当然一碗の茶 a cup of tea の意味が論ぜられるのであるが、この表題は、単なる飲み物としての茶を入れる茶碗という意味に重ねて、人間性の温かな発露である茶を注ぐ器としての茶碗という意味を表している。一碗の茶の中に人間の生き方を見るという姿勢

である。

冒頭の第一段落で、通常日本の茶道を表す *tea ceremony* という言葉ではなく、「主義、信仰」という意味を持つ接尾辞をつけた *Teaism*<sup>(6)</sup> という造語を用いている。茶をたてることには、思索活動、求道が潜んでおり、日本人の「生きる術」*Art of Life*<sup>(7)</sup> の表れであることを述べている。本稿では、*Teaism* を「茶道」、茶をたてる作法などの言及に用いられている *tea ceremony* を「茶の湯」と訳し分けることにしたい<sup>(8)</sup>。

裏千家十五代家元千宗室は、*Teaism* は、「茶道の宗教的要素について語ってはいるが、西洋の物差しで茶の湯を説明しようとしている」として、表現が適切でないと指摘している<sup>(9)</sup>。たしかに天心自身「自分の無知をさらけ出しているかもしれない」<sup>(10)</sup>と語ってはいるが、この本は、まさに「西洋の物差しで」茶の湯を説明しようとした本である。茶の湯の内に秘められた精神的、宗教的側面を明示する *Teaism* は、天心の目的にかなった造語であると思われる。第二章結びの押韻の鮮やかな文章、*Teaism was Taoism in disguise.* を読むと、ほかの言葉に置きかえられないことが明白である。

この章の第一段落に、『茶の本』の内容が凝縮されている。

薬用から転じた茶という日常の飲み物が、日本では、15世紀に美を崇拝する宗教—茶道—となった。茶道は、穢れある日常生活の中での美を崇敬する精神に基づいた儀式である。その教えは純粹、調和、相互への思いやりの神秘、社会秩序への憧憬を説くものである。その教義が本質的に「不完全」を尊ぶのは、われわれが人生と知っているこの不可能なものの中で、何か可能なことを成し遂げようと心くばりをしながら試みるからである。

Tea began as a medicine and grew into a beverage....The fifteenth century saw Japan ennoble it into a religion of aestheticism — Teaism. Teaism is a cult founded on the adoration of the

beautiful among the sordid facts of everyday existence. It inculcates purity and harmony, the mystery of mutual charity, the romanticism of the social order. It is essentially a worship of the Imperfect, as it is a tender attempt to accomplish something possible in this impossible thing we know as life. <sup>(11)</sup>

天心の「茶道」の定義は、「日常の中に美を見つけてあがめること」である。そして「茶道」に託した天心の人生観は、「不可能なことが多い世の中で、何か成し遂げようとする過程が人生」であろう。

第一章の後半では、東洋も西洋の文化を学ぶつもりで表面的なまねに終わっているところもあるが、西洋はいつになったら東洋を理解するのか、東洋のほうが優れている部分もあるのだと言い次のように続ける。

Strangely enough humanity has so far met in the tea-cup. It is the only Asiatic ceremonial which commands universal esteem. The white man has scoffed at our religion and our morals, but has accepted the brown beverage without hesitation. The afternoon tea is now an important function in Western society. <sup>(12)</sup>

ここにこの章の表題「茶碗」が東西の人間性の出会いの場として登場する。人間性 *humanity* とは、東西の異なる文化を超えて、同じ人間として共感し相互に理解できる度量をもった人の姿である。つまり、「不可能」の中で可能なことを探る（例えば、客への心配りに完璧を期する）「茶道」の心も暗示していよう。定冠詞つきの名詞 *tea-cup* は茶碗というものの総称であり、用と美を兼ね備えた茶道具である。東洋でも西洋でもおいしく味わうことのできる茶を飲むという、人としての幸せが注がれる器である。注ぎ込まれるのは、また、不完全な人生の中に味わいを見出す「生きる術」つまり「茶道」の心である。

そして茶の愛好者としてサミュエル・ジョンソンについてチャールズ・ラムの名を上げ、「こっそりと良いことをして、そのことがたまたま見つかってしまうことが一番うれしいというラムの文章には茶道の真髄が聞こえてくる」と述べ、次のように続ける。

For Teatism is the art of concealing beauty that you may discover it, of suggesting what you dare not reveal. It is the noble secret of laughing at yourself, calmly yet thoroughly, and is thus humour itself, — the smile of philosophy...Perhaps nowadays it is our demure contemplation of the Imperfect that the West and the East can meet in mutual consolation. <sup>(13)</sup>

「不完全について慎み深く思い巡らす中で」、相手を侮蔑したり糾弾するのではなく、「西洋と東洋が出会って相互に慰めあうことができる」のである。「あえて明かそうと思わなかったことを暗示する術、ユーモアそのもの、微笑みながら語ることのできる心の余裕がある哲学」、表現は変わっても、すべて「茶道」のことである。

最後の段落では、「一服の茶をすすりながら、はかないことを夢見、美しくも愚かしいことへの思いに浸ろう」と誘っている。心静かに味わう至福の一服。頭韻 [b] と二重母音 [ai] の連続で、明るい茶室で茶釜の松籟の音を聞いているようである。

Meanwhile, let us have a sip of tea. The afternoon glow is brightening the bamboos, the fountains are bubbling with delight, the sighing of the pines is heard in our kettle. Let us dream of evanescence, and linger in the beautiful foolishness of things. <sup>(14)</sup>

## V. 第二章 茶の流派 The Schools of Tea —茶の歴史—

天心のいう「流派」、この章の表題の Schools とは、現代のいわゆる抹茶、煎茶などの各流派のことではなく、茶の発展段階を時系列でみて、時代によって変化した茶のいれ方のことである。天心は、この章と次の第三章で、「茶道」の変遷を説明する。

茶は芸術作品でありおいしい茶をいれるには達人の手が必要とされ、完全な茶の中には「真の美」がなければならぬと説き起こし、次の段落から歴史的説明に移る。

中国の唐の時代の団茶（煮立てる）the Boiled Tea、宋の時代の抹茶（あわ立てる）the Whipped Tea、明の煎茶（湯に浸す）the Steeped Tea の三段階の発展を、天心は「古典派、浪漫派、自然主義派」と呼ぶ。8世紀半ば、陸羽が『茶経』を著して初めて茶が理想化され、聖典を持つにいたったのである。それは仏教・道教・儒教が統合の道を探していた唐の時代で、陸羽は「茶の湯」に万物を支配する調和と秩序を見ていたという。宋の時代になると、「永遠の変化の中に不滅があるとする道教の考え方が浸透して」、人は自然と相対せざるを得なくなる。「茶は詩的気晴らしではなく自己実現の一方法となった」のである。「仏教の中では、南方禅の宗派が、洗練された茶の湯の礼法を完成し、それが15世紀に日本の茶の湯となった」のだ。そのとき以来、茶の理想が日本で確立されて、「茶道」となり、「生きる術の宗教」となったのだという。17世紀半ばには明の煎茶が日本で知られるようになり、「日常生活では煎茶が抹茶にとってかわったが、抹茶が茶の中の茶であることに変わりはない」という。

Tea with us became more than an idealization of the form of drinking; it is a religion of the art of life. The beverage grew to be an excuse for the worship of purity and refinement, a sacred function at which the host and guest joined to produce



for that occasion the utmost beatitude of the mundane....A subtle philosophy lay behind it all. Teatism was Taoism in disguise. <sup>(15)</sup>

茶は、「主人と客人とが協力してありふれた日常の中に（一期一会の）至福のひとつを持つ聖なる儀式である」とする。ゆえに、「茶道は道教が姿を変えたもの」なのである。大切なのは、完成というより完成に至る過程なのだ。

## VI. 第三章 道教と禅 Taoism and Zennism – 茶道の思想的背景–

この表題にも、天心の意図が明確である。禅宗という日本語には、通常 Zen または the Zen school という訳語を当てる。天心は Teatism 同様、接尾辞をつけて Zennism とし、座禅という実践を通して得られる悟り、哲学的側面を強調しなかったのだと思われる。Zennism を訳すと「禅道」であろうが、禅宗をさしていると思われるので、本稿では「禅」という言葉を用いる。

道教の「道」は、文字通りには通路を意味するが、「通路そのものというよりそこを歩いていくことを意味する」と説明している。

The Tao might be spoken of as the Great Transition. Subjectively it is the Mood of the Universe. Its Absolute is the Relative. <sup>(16)</sup>

「大いなる推移、宇宙の気、絶対は相対である。」壮大な宇宙の中にあって、正も邪も相対でしかありえない、と道教では言っているという。「生き方の術」は「移ろいゆく無限」である「現在」の中、「環境に適應していく術」なのである。「道教は、日常生活をありのままに受け入れ、悩みと嘆きのこの世に美を見出そうとする。」禅も、道教と同様、相対を尊ぶが、日常のありふれた物事の中に精神と同等の重要性を

認めている。

Zennism, like Taoism, is the worship of Relativity. <sup>(17)</sup>

It held that in the great relation of things there was no distinction of small and great, an atom possessing equal possibilities with the universe. <sup>(18)</sup>

「美の理想に思想的基礎を与えたのが道教で、禅はその理想を現実のものとしたのである」との説明である。

## VII. 第四章 茶室 The Tea-Room ー茶を立てる環境ー

第三章までは、抽象的な議論だったが、第四章からは、茶の湯を实践する場面で目にするものを描写し、それぞれの事物の見方、与えられている意味が説明される。

この章では、茶室と西洋建築、相互の室内のしつらえ方に文化の違いが際立って現れていることが指摘される。

まず、茶室の呼称「すきや数寄屋」の説明から始まる。茶室を「数寄屋」という漢字で表すと、「好みの家」Abode of Fancyつまり、詩的衝動を表す家である。「空き家」とすれば、Abode of Vacancyつまり、その時々で審美的に必要なもの以外は一切物が置かれていない状態を表す。「非対称の数寄屋造り」とすれば、Abode of the Unsymmetricalつまり、想像力によって補完して完全なものとする余地を残しておく、不完全を尊ぶ精神の表れである。このような考えから建てられている茶室は、西洋の目から見ると単なる殺風景な小屋である。しかし芸術的配慮が行き届いている茶室には、材料にも細工にも優れた職人の仕事が見られる。

そして大事なことは、「16世紀には、茶室の影響で一般の日本家屋の内装は簡素を極めるようになって、外国人の眼から見れば無味乾燥なほどである」<sup>(19)</sup> という。

「ゆいまきょう維摩経の一節から定められた正統な茶室の大きさは4畳半」客人は

待合を出て、露地を通して茶室にいたるまでに外界とのつながりを絶ち、聖域へと house of peace へと進んでいく。身分の上下も捨てにじり口から身を低くして茶室に入ると、茶釜のたぎる音だけの静かな世界になる。

Zennism....recognized the house only as temporary refuge for the body....In the tea-room fugitiveness is suggested in the thatched roof, frailty in the slender pillars....The eternal is to be found only in the spirit which, embodied in these simple surroundings, beautifies them with the subtle light of its refinement. <sup>(20)</sup>

茶室の構造には、はかなさが暗示されているのであり、その簡素な環境に体现されている永遠を見出すには、「洗練された鑑賞眼というほのかな明かりで照らし、美しさを認めることのできる精神」が必要なのである。西洋のレンガ造り、石造りなどの大きな邸宅に住み、豊かな生活をしている欧米の人々にとって、木造の簡素な家に住む日本人の生活はどのように見えていたのか。一見みすぼらしい奇異に映る生活のなかに、美を見出す鑑識眼、思想的裏づけが隠されていると知れば、一見貧しい生活を見る目が変わるのではなかろうか。

この章の最後で、西洋の家の内装は美術館のようだと批判している。マントルピースなどの上に左右対称に飾り物があったり肖像画が飾ってあったりと不必要なものが多い。食卓に着いたとき、目の前の相手と壁の肖像とどちらが本物か迷うというような挿話には、ボストンで寄宿していた天心の肉声が聞こえてくるようである。簡素な茶室は、外界のわずらわしさから逃れることができる空間なのである。「今まで以上に茶室が必要とされているのではないか」という天心の問いは、物が豊かになりすぎた現代の日本に同様に向けられねばならない。

## VIII. 第五章 芸術鑑賞 Art Appreciation —作品の暗示への共感—

この章では、茶道に限らず、一般的に芸術作品を鑑賞するとはどういうことかを論じている。芸術鑑賞に必要なのは、「作品に共感し生じる心の交流であり、その交流によって無限を垣間見ることができる」という。作品にひきつけるために作者たちは暗示という手法を用いる。

Nothing is more hallowing than the union of kindred spirits in art. At the moment of meeting, the art lover transcends himself. At once he is and is not. He catches a glimpse of Infinity...It is thus that art becomes akin to religion and ennobles mankind. It is this which makes a masterpiece something sacred.<sup>(21)</sup>

鑑識眼は進歩するが、鑑賞能力の限界、つまり宇宙の中での自分の姿（能力）の範囲内でしか鑑賞できないことを知っておくべきである。現代の芸術隆盛の風潮として、真に美しいものを賛美するのではなく、世間がもてはやすものや作者の名前で評価をしているのは悲しむべきことである、と続ける。

We classify too much and enjoy too little. The sacrifice of the aesthetic to the so-called scientific method of exhibition has been the bane of many museums.<sup>(22)</sup>

この章最後のこの記述には、天心のボストン美術館の美術館員としての想いが吐露されている。日本で、廃仏毀釈のお寺から、あるいは古美術商や名家の蔵から、美術品を収集したビゲロー William Sturgis Bigelow (1850-1926) 等の個人収集家が美術館に寄贈した仏像や版画、漆器、磁器などの整理に追われる日々を過ごしていた時期である。天心の着任当時は、美術作品を材質や技法ごとに構成して展示する方式だっ

たが、1909年には、展示方式が時代別に構成され、ボストン美術館の作品の美的な質に重点を置いた新しい方式が採用されたという。仏像は寺院の本堂を模した一室を作って照明を落として展示するという工夫をしたのであった<sup>(23)</sup>。

## IX. 第六章 花 Flowers —詩を愛する心—

天心にとって美しい花はなくてはならないものだったようで、花への思いを感傷的な筆致で書き始めている。

Surely with mankind the appreciation of flowers must have been coeval with the poetry of love....The primeval man in offering the first garland to his maiden thereby transcended the brute. He became human in thus rising above the crude necessities of nature. He entered the realm of art when he perceived the subtle use of the useless.<sup>(24)</sup>

花を愛情表現の手段として使ったときに、自然界の美しさを感じることで獣性を脱し、芸術を愛でる精神を獲得することができたということであろう。実際には、花を切る、いけるという残酷な行為を行うのであるが、「『変化』が唯一『永遠』なのであれば、なぜ『死』を『生』と同じように歓迎しないのか。」<sup>(25)</sup>「花にわれわれと一緒に美のために犠牲になってもらい、われわれ自身を『純粹』と『簡素』に捧げて償いしよう。」<sup>(26)</sup>茶人の生け花は、花に葉を添えて、野の花のように、草花の生きている状態を全体で美しく表すことが目的である。それに対し、西洋では宴の席に大量の花を飾ることも、花瓶に花だけを突っ込んであるようなことも見かけるとやんわり批判している。

最後の段落で語られるのは、**Flower Sacrifice**「花の犠牲」である。花は臆病者ではない。風に散り、笑いながら流れていく水面に流される桜が、「春よ、お別れです！永遠に向かって旅立っていきます」<sup>(27)</sup>と

いっているように見える、と語る。自らの時節が終わったら、潔く美しく死へと向かう、自然の中の花が人間に襟を正させるのである。

## X. 第七章 茶の宗匠たち Tea-Masters

—生きる、そして微笑みながら未知の国へ—

最終章は今までの章に比べて短い。茶人たちが、茶室の中だけでなく、自らの生活全般を芸術それ自体にしようと律したおかげで、日本では庭園、陶磁器、蒔絵、織物、絵画などさまざまな分野で高度に洗練されたものを享受することができるようになったのである。一般民衆の日常生活への影響も、室内のしつらい、衣服、料理、礼儀作法など全般にわたっており、「茶は民衆の生活に入り込んでいる」<sup>(28)</sup> という。

偉大な茶人はいつでも未知の国へと旅立つ心構えができていた。美しく生きたものだけが美しく死ぬことができるのだ。この章は、茶の湯を完成させたといわれる千利休が別れの茶会を開き、自刃し微笑を浮かべながら未知の国へと旅立っていく印象的な場面で終わっている<sup>(29)</sup>。茶道具はそれぞれ客人に分けたが、茶碗のみは「不運な唇によって汚されたこの茶碗を二度と使わせない」<sup>(30)</sup> と言って、自ら砕いてしまうのである。移ろい行く「無限」である現在を、茶碗を砕くことによって、確固たる現在、「死」へと変えたのであろう。こうして心の平静を失わない茶人は、流れ行く桜のように未知の国へと向かう。この茶人の姿に、日々精進し「茶道」を体得することで、死をも恐れずに自分の生を全うすることができるのか、と読者は感銘を受けるのではないであろうか。

## XI. 天心の人生観

以上のように、「茶道」を通して日本人の筋の通った精神生活を伝えようとした天心であるが、彼自身の人生は茶人の姿を理想としていたのであろうか。彼の人生観を暗示する次の表現を検討してみたい。最初と最後の章より引用する。

It (Teaism) is essentially a worship of the Imperfect, as it is a tender attempt to accomplish something possible in this impossible thing we know as life. <sup>(31)</sup>

Those of us who know not the secret of properly regulating our own existence on this tumultuous sea of foolish troubles which we call life are constantly in a state of misery while vainly trying to appear happy and contented. <sup>(32)</sup>

「人生と呼ぶ不可能なもの」、「われわれは、自分たち自身の日々の生活をうまく調整していく秘訣を知らないので、たくさんの愚かで心乱れる厄介ごとで成り立っている人生の中で、常に精神的苦痛を感じているのに、無駄な努力でありながら、幸せで満足しているように見せかけようとするのである。」人生をこのように表現した天心は、母の早世から始まって、恋愛や仕事の上での挫折が連続した苦い思いを乗り越えていないように思う。異国にあって、the cup of humanity や花に慰めを見出していたであろうが、『茶の本』に現れている利休の境地には程遠い。「西洋の物差しで」「茶道」を説明した天心が、移りゆく自然に永遠を見る茶の精神に身をゆだねていたことは間違いないが、上記の文章から、「茶道」の悟りによって天心に救いがもたらされたとは考えにくい。

実生活では、天心は、茶道の精神的支柱であると述べている道教に生きる指針を求めたようである。晩年は、ボストンに半年、茨城県五浦に半年過ごし、海釣り三昧であったという。五浦に建てた自宅の庭の離れ、六角堂は海に張り出している絶壁の上であり、240° のパノラマで太平洋を見渡せるという <sup>(33)</sup>。四方を囲われた茶室の正反対だが、自然のリズムと一体になるには最適で、その中で『茶経』を読むことが多かったという。がらんとした簡素な空間が内省には最適であったとみえる。もともと天心は海外でも和服で通したくらい <sup>(34)</sup> はっきりと日本の代表としての意識を持って行動し、『茶の本』で日本の思想的側面を紹介することに使命感をもっていた。六角堂が外に向かって開かれている

ことで暗示されているように、天心の関心も仕事も外に向かって発信することであった。茶室の中には納まりきらない人生であった。『茶の本』の3年前に出版した、「アジアはひとつ」で始まる『東洋の理想』*The Ideals of The East* (London: John Murray, 1903) にみられる、アジア全体を視野に入れた芸術論に即した活動をしてゆくようになるのである。

ボストン美術館のコレクション充実を目的として、1906年、1912年には中国へ旅行。同12年にはインドへも古美術調査旅行をし、タゴール一族の女流詩人プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジー Priyambada Devi Bannerjee (1871-1935) と運命的な出会いをした<sup>(35)</sup>。天心が、亡くなるまでの1年間、彼女との手紙のやり取りを心の支えにしていたことは、茶人の覚悟を決めた平静な境地に至っていないことを示しているよう。「悩みと嘆きのこの世に美を見出そうとする」道教の精神そのままの生き方であったと思われる。Tenshin-ism was Taoism in disguise. である。

## XII. 終わりに

『茶の本』は、一世紀経った現在でも多数の言語に翻訳されていることから、日本の精神文化の表れとしての「茶道」紹介という天心の目的は、十分達成されていると思われる。現在の日本から見て、『茶の本』の中に描かれる簡素な生活は別世界同然である。日本人にとっても精神的支柱を探るために、再度読まれるべき本であろう。

『茶の本』には茶道初心者として出会ったのだが、読むうちに文学作品として味わうことになった。音読に適した文章、含蓄ある文章に思わず時間を忘れることがあった。日本語訳の出版も多く、同じ文章をそれぞれの訳者が自分の文体で完訳しているのには脱帽であったが、本稿の引用は、すべて拙訳とした。天心の言う「翻訳は叛逆であり…金襴の裏地であるにすぎない」<sup>(36)</sup> のであれば、作品の論考は金襴の模造品に過ぎないのかもしれない。糸を掛け違っていないことを祈るばかりである。



注

- (1) 英文著書、手紙など海外では、Okakura-Kakuzo として知られている。福永光司著「岡倉天心と道教」『岡倉点心全集第8巻』p.480によれば、幼名角蔵と名づけられたが、大学に通う頃には覚三という漢字に改名していたという。彼がこの漢字を選び取ったのも、「覚」は覚醒の「覚」であり、道教の哲人莊周の著書『莊子』にみえる「大覚」の語に基づく。また覚三の「三」は、彼の論文「東アジア美術における宗教」に、「天は上、地は下、人はその間」——天地人の三元——とある「三元」の「三」に基づくという。日本では、生前彼の用いた天心という号から、弟子や遺族が書名・碑銘に岡倉天心という名を選び取り流布しているので、本稿では岡倉天心と呼ぶ。
- (2) 『現代日本文学大系2』筑摩書房、昭和47年、pp.445-453。  
岡倉由三郎（1866・明治元年-1936・昭和11年）は、「岡倉英和」として知られた『研究社新英和大辞典』を編纂した言語学者、英語教育家。1906年に出版された『茶の本』の献辞は「ラファージュ先生に」であるが、底本には、「由三郎へ」との献辞があり、由三郎も、日本を紹介する英文著作『大和心』*The Japanese Spirit*, London: Archibald Constable and Company, Ltd., 1905 を、「兄上へ」と捧げている。茶の湯の知識は、由三郎によると、1880年頃正式に正阿弥という茶人から妻基子とともに学んだのが始まりだという。村岡博訳、『茶の本』（岩波書店、2002年）p.7。参照。
- (3) 下村英時編、『天心とその書簡』（日研出版、昭和39年）p.622。
- (4) Okakura-Kakuzo, *The Book of Tea*, Boston, Rutland, Vermont, Tokyo: Tuttle Publishing, 2001, p.xv. 以下、『茶の本』からの引用は同書のページのみを記す。
- (5) 村岡博訳、『茶の本』（岩波書店、2002年）p.7。
- (6) Okakura-Kakuzo, *The Book of Tea*, p.3.

- (7) Okakura-Kakuzo, *The Book of Tea*, p.7.
- (8) 以降、要約文中「」を付した部分は、本文の引用の拙訳である。
- (9) 『茶の本』 浅野晃訳、講談社インターナショナル、2004年、序文 p.26。著者の第十五代家元の斎号は鵬雲斎玄室。鵬雲斎は、また、「茶道の本当の味わいは、懐石の供される正式な茶会の茶事にある」と佐々木三味著『茶道歳事記』の序文の中で述べている。天心がボストンで行った茶会の茶会記がないので詳細は分からないが、懐石は供されなかったと思われる。振舞われたのは、薄茶、また愛用の煎茶茶碗が残されていることから見て煎茶である可能性もあると推測される。さらに、茶をたて喫するという稽古の重要性にもふれていない。これらのことから、現代の茶道継承者が、正統な茶道とは言えないと、違和感を抱くのも無理はないが、天心の想定した読者への執筆からくる限界であると思われる。このことが、本書の価値を減ずるものではない。
- (10) Okakura-Kakuzo, *The Book of Tea*, p.9.
- (11) *Ibid.*, pp.3-4.
- (12) *Ibid.*, p.11.
- (13) *Ibid.*, p.15.
- (14) *Ibid.*, p.17.
- (15) *Ibid.*, pp.33-34.
- (16) *Ibid.*, p.38.
- (17) *Ibid.*, p.49.
- (18) *Ibid.*, p.52.
- (19) *Ibid.*, p.55.
- (20) *Ibid.*, pp.66-67.
- (21) *Ibid.*, pp.81-82.
- (22) *Ibid.*, pp.86-87.
- (23) 『岡倉天心ー日本文化と世界戦略ー』ワタリウム美術館、平凡社、2005年、p.201.

(24) Okakura-Kakuzo, *The Book of Tea*, pp.89-90.

第二段落の、花なくしての暮らしは送れない、花は常にわれわれの友であり、死後地中深く葬られたとき、花は悲しみにくれて墓前から立ち去りがたい思いをするのだ、というくだりには、天心が亡くなる直前に書いた手紙の一節が思い出される。自分の墓には「水仙と芳香を放つ梅を植えて」と記された、プリヤンバタ・デーヴィー夫人宛の1913年8月2日の戒告“An Injunction”という手紙を参照。下村英時編、『天心とその書簡』（日研出版、昭和39年）p.577.

(25) Okakura-Kakuzo, *The Book of Tea*, p.99.

(26) *Ibid.*, p.99.

(27) *Ibid.*, p.107.

(28) *Ibid.*, p.112.

(29) *Ibid.*, p.116.

(30) *Ibid.*, p.116.

(31) *Ibid.*, p.4.

(32) *Ibid.*, p.113.

(33) 『岡倉天心－日本文化と世界戦略－』 p.35.

(34) 『岡倉天心－日本文化と世界戦略－』 p.114、p.186.

(35) 『岡倉天心－日本文化と世界戦略－』 p.150、p.165.

(36) Okakura-Kakuzo, *The Book of Tea*, p.36.

## 参考文献

Okakura-Kakuzo, *The Heart of Heaven-Being a Collection of Writings*, Tokyo, Nippon-Bijutsuin, 1922

Sasaki Sanmi, *Chado -The Way of Tea-*, Tokyo, Tuttle Publishing, 2005

『岡倉天心全集』第1-8巻、別巻（平凡社、1979-81年）

大岡信著、『岡倉天心』（朝日選書、1985年）

- 大岡信著、『宝石の声なる人にープリヤンバダ・デーヴィーと岡倉覚  
三、愛の手紙ー』（平凡社、1982年）
- 岡倉一雄著、『岡倉天心をめぐる人びと』（中央公論美術出版、平成十  
年）
- 桶谷秀昭著、「神々の黄昏ー岡倉天心とラフカディオ・ヘルン」『文明  
開化と日本的想像』（福武書店、1987年）
- 桶谷秀昭訳、『英文収録 茶の本』（講談社学術文庫、1994年）
- 加藤恵津子著、『<お茶>はなぜ女のものになったかー茶道から見る  
戦後の家族ー』（紀伊國屋書店、2004年）
- 木下長宏著、『岡倉天心ー物ニ観ズレバ竟ニ吾無シー』（ミネルヴァ書  
房、2005年）
- 熊倉功夫著、『茶の湯文化史』（NHK人間大学、1995年）
- 熊倉功夫／田中秀隆編、『茶道文化論』（茶道学大系 第一巻、淡交  
社、平成十一年）
- 黒川五郎著、『ティーセラピーへの招待』（川島書店、2005年）
- 幸津國生著、『茶道と日常生活の美学』（花伝社、2003年）
- 下村英時編、『天心とその書簡』（日研出版、1964年）
- 千玄室著、『茶の精神』（講談社学術文庫、2003年）
- 立木智子著、『岡倉天心「茶の本」鑑賞』（淡交社、平成十年）
- 谷晃編、『茶の美術』（茶道学大系第五巻、淡交社、平成十二年）
- 谷晃著、『わかりやすい茶の湯の文化』（淡交社、2005年）
- 中村愿編、『岡倉天心アルバム』（中央公論美術出版、平成十二年）
- ピーター・ミルワード著、『お茶とミサー東と西の「一期一会」ー』（  
P H P 研究所、1995年）
- ボストン美術館東洋部編、『ボストン美術館東洋美術名品集』（日本放  
送出版協会、1991年）
- 堀岡弥寿子著、『岡倉天心ーアジア文化宣揚の先駆者ー』（吉川弘文  
館、昭和49年）
- 堀岡弥寿子著、『岡倉天心との出会い』（近代文芸社、2000年）